

※答えはすべて解答欄に記入すること

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～8)に答えよ。

大阪は「だす」であり、京都は「どす」である。大阪から京都へ行く途中、山崎^{注1}あたりへ来ると、急に気温が下^{さが}って、ああ京都へはいったんだなと感ずるとい意味の谷崎潤一郎^A氏の文章を、どこかで読んだことがあるが、大阪の「DAS」が京都の「DOS」と擦れ合っているのも山崎あたりであり、大阪の「DAS」という音は、山崎に近づくにつれて、次第に「A」の強さが薄れて行き、山崎あたりでは「A」と「O」との重なり合った音になって、やがて京都へ近づくにつれて、「O」の音が強くなり、「DOS」となるのである。山崎あたりに住んでいる人たちの言葉をきいていると、「そうだす」と言っているのか、「そうどす」と言っているのか、はっきり区別がつかない。

i

、「だす」よりも「どす」の方が、音がどぎついように思われる。「どす黒い」とか「長どす道中」とか「どすと尻餅ついた」とか、どぎつくてブツソウ^アで殺風景な聯想^{れんそう}を伴うけれども、しかし、

ii

、「だす」よりも「どす」の方が優美であることは、京都へ行った人なら、誰でも気づくに違いない。いや、京都の言葉が大阪の言葉より柔^{やわい}かく上品で、美しいということは、もう日本国中津津浦浦まで知れわたっている事実だ。同時に大阪の言葉がどぎつく、ねちこく、柄が悪く、下品だということも、

a

事
実である。

たしかに京都の言葉は美しい。京都は冬は底冷えし、夏は堪^たえられぬくらい暑くおまけに人間が薄情で、けちで、齒がゆいくらい引つ込み思案で、インケン^イで、頑固で結局景色と言葉の美しさだけと言った人があるくらい京都の、ことに女の言葉は音楽的であろうとさせられてしまう。しかし、私は京都の言葉を美しいとは思ったが、魅力があると思っただ

とは一度もなかった。私にはやはり京都よりも大阪弁の方が魅力があるのだ。優美で柔やわらかい京都弁よりも、下品でどぎつい大阪弁の方が、私には魅力があるのだ。なぜだろう。^B

多くの作家が京都弁を使った小説を書いている。が、私にはどの作家の小説に書かれた京都弁も似たり寄ったりで、きまり切った紋切型であるような気がしてならない。これは私自身まだ京都弁というものを深く研究していないから、多くの作家の作品の中に書かれた京都弁の違いを、見分けることが出来ないのだろうとも、一応考えられるけれども、一つには、京都弁そのものが変化に乏しく、奥行きが浅く、ただ紋切型をくりかえしているだけにすぎないのではあるまいか。

もつとも、私はいつかあるお茶屋^{注2}で、お内儀^{注3}が芸者と次のような言葉をやりとりしているのを、耳にした時は、さすがに魅力を感じた。

「桃子はん、あんた、おいやすか、おいにやすか。オーさん、おいやすおいやすのどっせ。あんたはん、どないおしやすか」「お母ちゃん、あて、かなわんのどっせ。かんにんどっせ」その会話は、オーさんという客が桃子^{トモ}という芸者^{トモ}と泊りたいとお内儀にたのんだので、お内儀が桃子^{トモ}をクド^ウいている会話であって、あんたはここに泊るか、それとも帰るかというのを、「おいやすか、おいにやすか」といい、オーさんは泊りたいと言っているというのを、「オーさん、おいやすおいやすのどっせ」という。その「^{アイ}」の音の積み重ねと、^エロコツな表現を避けたいいまわしに、私は感心した、そして桃子という芸者がそれを断るのを、自分は泊ることは困る、勘弁してくれという意味で「あて、かなわんのどっせ。かんにんどっせ」と含みを持たせた簡単な表現で、しかも婉曲^{えんきよく}に片づけているのにも感心した。

それともう一つ私が感心したのは、祇園^{注4}や先斗^{注5}等の柳^{注6}の巷の芸者や妓^{注7}たちが、客から、おいどうだ、何か買ってやろうかとか、芝居へ連れて行ってやろうかとか、こんどまた

来るよ、などと言われた時に使う「どうぞ……」という言葉の言い方である。ちよつと肩を前へ動かせて、頭は下げたか下げないか判らぬぐらいに肩と一緒に前へ動かせ、そして「どうぞ……」という。「どうぞ」という音を、肩や頭が動いている間ひっぱって、「ぞ」を軽く押える。この一種異色ある「どうぞ……」は「どうぞ」の音のひっぱり方一つで、本当に連れて行ってほしいという気持やお愛想で言っている気持や、本当に連れて行ってほしいという気持や、客が嘘を言っているのが判っているという気持や、その他さまざまなニュアンスが出せるのである。ちよつと、彼女たちが客と道で別れる時に使う「さいなら」という言葉の「な」の音のひっぱり方一つで、彼女たちが客に持っている好感の程度もしくはケンオの程度のニュアンスが出せるのと同様である。

しかし、それとも考えようによっては、

b

証拠で、彼女た

ちはただ教えられた数少い言葉を紋切型のように使っているだけで、ニュアンスも変化があるといえはいえるものの、決して個人的な表現ではなく、又大阪弁の「ややくし」という言葉のようにざつと数えて三十ぐらいの意味に使えるほどの豊富なニュアンスはなく、結局京都弁は簡素、単純なのである。

まるで日本の伝統的小説である身边小説のように、簡素、単純で、伝統が作った紋切型の中でただ少数の細かいニュアンスを味っているだけにすぎず、詩的であるかも知れないが、散文的な豊富さはなく、大きなロマンや、近代的な虚構の新しさに発展して行く可能性もなく、いつてみれば京都弁という身边小説的伝統には、新しい言葉の生れる可能性は皆無なのである。京都弁はまるで美術工芸品のように美しいが、私にとっては大して魅力がないゆえんだ。

(織田作之助「大阪の可能性」による)

(注)

- 1 山崎——大阪府と京都府の境界にある京都府乙訓郡大山崎町、大阪府三島郡島本町付近を広域的に指す地名。
- 2 お茶屋——舞妓や芸妓が客をもてなす小さな宴会場。
- 3 お内儀——他人の妻を敬つていう語。
- 4 祇園——お茶屋などが集まる京都の「五花街」の一つ。
- 5 先斗——同右。
- 6 柳の巷——遊郭、色町。
- 7 妓——酒席で客に対応する女性、芸者。

問1 傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ。

問2 傍線部A「谷崎潤一郎」の作品を次のア～オの中から二つ選び、記号で答えよ。

- ア 潮騒 イ 春琴抄 ウ 雪国 エ 細雪 オ 夜明け前

問3

と

に入れるものの組み合わせとして最も適当なものを次のア

～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア(i)アルファベットで書けば ii)耳に聴けば) イ(i)耳に聴けば ii)字で書けば)
- ウ(i)アルファベットで書けば ii)字で書けば) エ(i)字で書けば ii)耳に聴けば)

問4

に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 歴史的な
イ ゆがめられた
ウ 外形的な
エ 隠れた
オ 周知の

問5 傍線部B「なぜだろう。」とあるが、その答えのヒントとなる、大阪弁にあって京都弁にはないものは何か。本文中から八字で抜き出せ。

問6 傍線部C「含みを持たせた簡単な表現で、しかも婉曲に片づけている」とあるが、どういう意味か。次のア～オの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア どちらとも取れるあいまいな言い方で、判断を相手任せにしている。
- イ 一見、断っているように見えるが、心の中の迷いを隠せないでいる。
- ウ 思わせぶりの態度で、意思を明確にしていない。
- エ 誤解を受けないよう、冷たくあしらっている。
- オ 明言を避けつつ、遠回しに拒絶の意思を示している。

問7

b

に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から

一つ選び、記号で答えよ。

- ア 京都弁にはさまざまなニュアンスが含まれる
- イ 京都弁がどうしても理解されにくい
- ウ 京都弁が特に女性に愛され続けてきた
- エ 京都弁そのものが結局豊富でない
- オ 京都弁を話す女性が見える

問8 傍線部D「美術工芸品のように美しい」とあるが、どういう意味か。次のア～オの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 実用性には欠けるが、歴史に彩られた華やかさがある。
- イ 見た目は美しいが、その背景には目に見えない苦しみがある。
- ウ 華やかな貴族文化の名残を感じさせる。
- エ 美術工芸品と同様に、古い歴史を誇っている。
- オ 伝統をそのまま受け継いでいるだけで、発展性がない。

第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。

「^A夏草やつわものどもが夢の跡」を^aもじった「この雪に馬鹿者どもの足の跡」という江戸川柳がある。雪が降れば、いさんで雪見に出歩く物好きをからかった句で、昔の江戸は今よりも雪の日が多かったようだ。

雪景色の浮世絵や雪見の名所の評判がそれを示している。実際に江戸時代後期の気候は寒冷で、隅田川の結氷という記録もある。ただ、雪にはしゃいだ江戸の人に対し、雪国の人^アが豪雪に苦しみ、恐れたという対比は^ア今昔変わらない。

越後の人・鈴木^サ牧^キ之^ノが、i 江戸の人と、ii 雪国の人を比べ「楽と苦と雲泥^イのちがいなり」と記したのもよく分かる。さて雪のシーズンも始まったばかりなのに、早くもドカ雪が雪国を襲っている。

列島上空への強い寒気の流入により、まだクリスマスも先なのに日本海側の地方や関東の山沿いでは記録的な大雪に見舞われている。群馬県みなかみ町や新潟県湯沢町では、24時間の降雪量がそれぞれ観測史上最高を記録したという。

交通への影響や停電の被害も各地で出ている。きょうも降雪は続くというから、屋根からの落雪や雪崩^ウへの警戒も必要だろう。例年ならクリスマスや年末年始寒波が話題となるが、雪国の人も驚く^エ師走半ばの記録的寒波^オの急襲である。

「雪は天から送られたB」とは氷雪の研究で知られた物理学者、中谷^ナ宇^カ吉^キ郎^ロの言葉である。シーズン^カのつけからのドカ雪も、荒々しさを増す地球規模の気候変動にまつわる天からの消息なのかもしれない。

(2020年12月17日付毎日新聞朝刊『余^ヨ禄^{ロク}』による)

問1 傍線部ア～オの漢字の読み仮名を書け。

問2 傍線部Aの俳句の作者名および、この句が収められている俳諧紀行文の作品名を答えよ。(漢字、仮名書きどちらでも可)

問3 傍線部a「もじった」、傍線部b「のつけ」の意味を答えよ。

問4

i

ii

に入れるのに最も適当なものを次のア

～オの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア 雪には関心のない
- イ 初雪が来れば喜ぶ
- ウ 川柳好きな
- エ これからの雪中生活を思う
- オ たくましい

問5

B

に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 恵み
- イ 警告
- ウ 手紙
- エ 刺客
- オ 試練

第3問 次の①～⑩のことわざ、慣用句の

(漢字、仮名書きどちらでも可)

に体の一部を表す言葉を入れよ。

①

が肥える

おいしい物を食べ慣れていて、味のよしあしを識別する力がつくこと。

②

から鼻へぬける

非常に賢いさま。

③

がすく

いやな気持ちがなくなり、すっきりする。

④

をくくる

冷淡にあしらう。

⑤

に衣を着せない

遠慮せずに思ったことを言う。

⑥

に火を点(とも)す

きわめて儉約した生活をする。

⑦

を分ける

夕立などが、ある地域を境にして一方では降っているのに、他方では晴れているさま。

⑧

を冷やす

驚き恐れて、ひやりとする。

⑨

を返す

引き返す。

⑩

も三度

いくらおだやかで優しい人でも、ひどいことを何度もされれば怒る。